

Vol.5

Are We

Going Back?

ゆらぐ環境問題

ゆれる環境意識

揺り戻しを受けた環境意識の現在地

Social
Issue
Lab **SIL**

環境問題が「揺り戻し」の雨を受けた今こそ、対話の素地を固める機会へ。

欧米を中心とした「揺り戻し」とされる動きは環境問題にも影響し、ニュースやSNSなどでも見聞きすることが増えている。揺り戻しの影響は小さくないが、これまでの取り組みすべてが振り出しに戻るわけではない。

揺さぶられている今だからこそ、環境問題に向き合い、対話を深めるきっかけに変えていくことを目指して。



Overview

調査対象者	全国の男女20-69歳
回答者数	3,000人
割付方法	令和2年国勢調査の性年代の構成比に基づいて割付し、世の中の縮図を再現
調査方法	インターネットリサーチ
調査期間	2025年2月17日(月)～18日(火)
調査企画	QO株式会社
調査委託先	株式会社マクロミル
調査内容	地球温暖化、気候変動、生物多様性といった環境問題の浸透状況 環境問題の”揺り戻し”への評価 企業・団体および政府の取り組みへの評価

刻一刻と失われていく、 生物多様性。

「生物多様性」とは、
単に動植物の種類が多いことを指すのではない。

地球上の生命、人・動物・植物・菌などあらゆる生きものが、
他の多くの生物とかかわって生きる、その相互のつながり、
地球環境そのものを指し示す。

20世紀以降の100年間。人類が自然環境を急激に変化させた結果、
多くの生物を減少・絶滅に追い込み、地球の「生物多様性」が損なわれている。
結果、毎年1,000種から1万種の生物が絶滅していると推定される。

生物多様性の喪失は大規模で、文字通り危機であり、
刻一刻と進む問題である。



Intro

調査から見えてきた 社会の揺らぎと 生活者の気持ち

環境問題が「揺り戻し」を受けの中で、わたしたちは、
そして世の中はそれをどのように受け止めているのか。

調査からは「揺り戻し」の動向が広く知られていることだけでなく、
揺り戻しへの懸念より賛同の声の方が多いことが明らかになった。

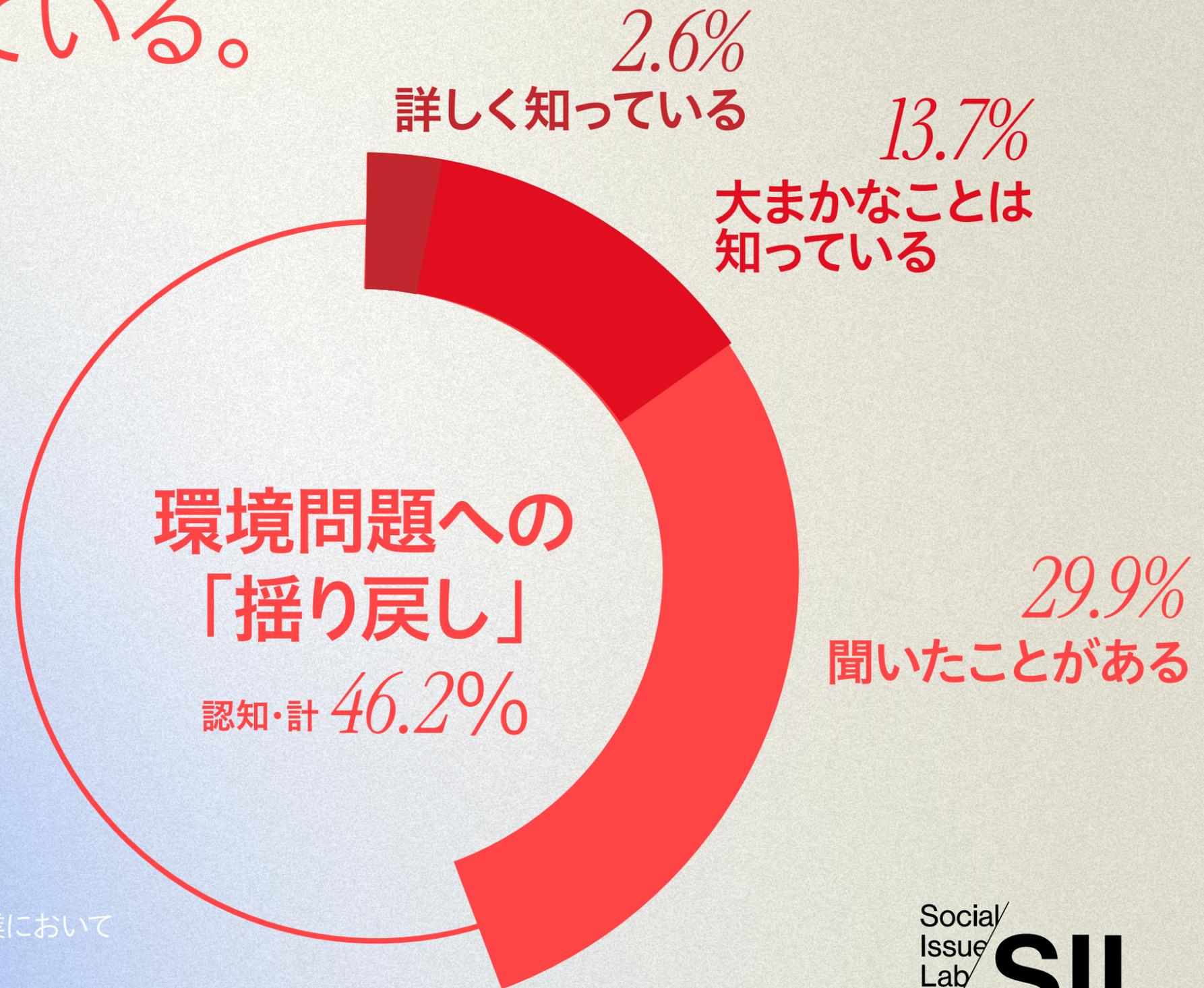
ショックな結果ともいえるその背景には、
知られていないことが影響しているようにも感じられる。

環境問題への「揺り戻し」は、 半数近くの人々が認識している。

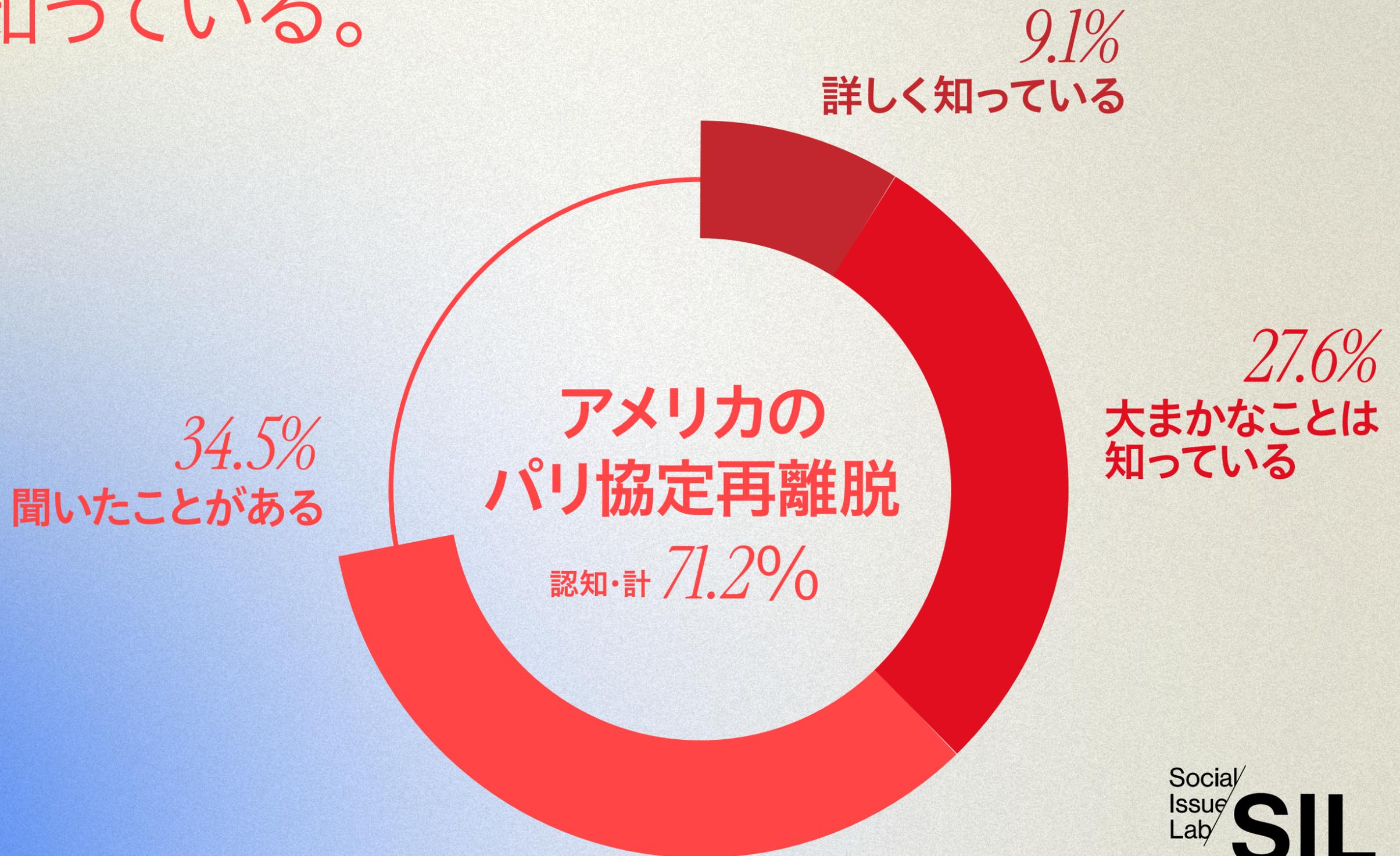


環境問題の解決に向けて様々な取り組みがなされてきましたが、昨今は世界各国で”揺り戻し”が起きています。あなたは、この「環境問題への”揺り戻し”」についてどの程度知っていましたか？

※環境問題対策の推進派ではない政党が躍進したり、政府や関連団体・企業において環境問題対策の撤回や否定的な動きが広がったりすることを指します。
全国男女20-69歳 3,000人の回答



トランプ大統領によるパリ協定再離脱は 7割以上が知っている。



政府の取り組みや各国の動向の認知率
全国男女20-69歳 3,000人の回答

揺り戻しに賛成の声が 懸念の声を上回っている。

賛成の声

行き過ぎた取り組みは無理が生じるため、
揺り戻しには賛成である

62.5%

環境問題解決のための当初の方針を策定するときから、
もっと慎重に考えるべきだったと思う

57.9%

懸念の声

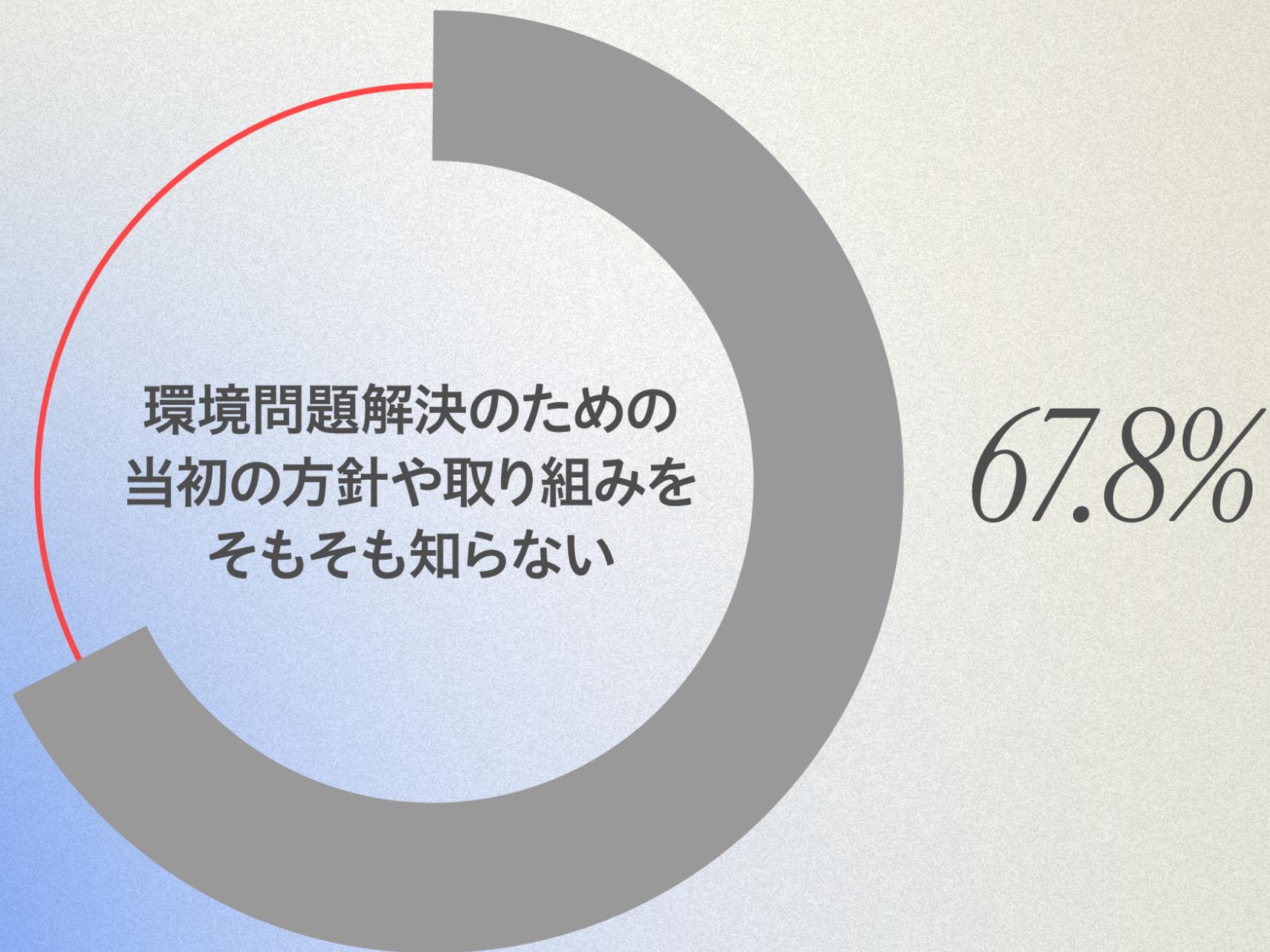
揺り戻しはこれまでの取り組みが
無駄になるため、反対である

37.5%

揺り戻しが行き過ぎてしまい、
停滞したり後退したりすると思う

36.0%

その背景には
「そもそもの方針を知らない」ことが大きそう。



「揺り戻し」への評価
全国男女20-69歳 3,000人の回答

揺り戻しの方針への 反対意見はあまり知られていない。

「トランプ大統領によってアメリカがパリ協定を再離脱した」

71.2%

「アメリカの石油・ガス業界の業界団体である米国石油協会(API)が、パリ協定の目標を長期的に支持する旨を表明した」

31.6%

「米国気候同盟(United States Climate Alliance)が、パリ協定目標の達成および取り組み継続を宣言した」

31.3%

「国連の生物多様性条約第16回締約国会議(CBD COP16)が2024年11月に閉幕し、世界の生物多様性保全の国際目標の達成度を評価する具体的な指標がおおむね合意された」

30.6%

政府の取り組みや各国の動向の認知率
全国男女20-69歳 3,000人の回答

Consideration

地球温暖化、気候変動、生物多様性の減少。
本来は身近なテーマだが、地球規模だからこそ
遠くも感じる。

それらを見聞きすることが「揺り戻し」により増
えている今、どれだけの人に理解されているの
か。一人一人が日々の生活の中で、自分ごととし
て捉えているのか。企業や各団体の取り組みは
どのように評価されているのか。生活者の環境
意識の現在地を確認していく。



気候変動や生物多様性は
理解度は低く、遠いテーマのよう。

生物の多様性の減少

32.5%

気候変動

54.7%

地球温暖化

69.5%

環境問題の理解

【詳しく知っている+大まかなことは知っている・計】

全国男女20-69歳 3,000人の回答

中でも、具体的な事象や原因は まだまだ知られていない。

生物多様性は減少している



絶滅危惧種の増加の一因に、地球温暖化がある



絶滅危惧種に指定される生き物は年々増加している



地球温暖化の一因に化石燃料の燃焼がある



生物多様性の減少の一因に、森林伐採や埋め立てなどによる
生息地の消失がある



気候変動により、地球環境に急激な変化がもたらされることが、
生態系を脅かす原因になる



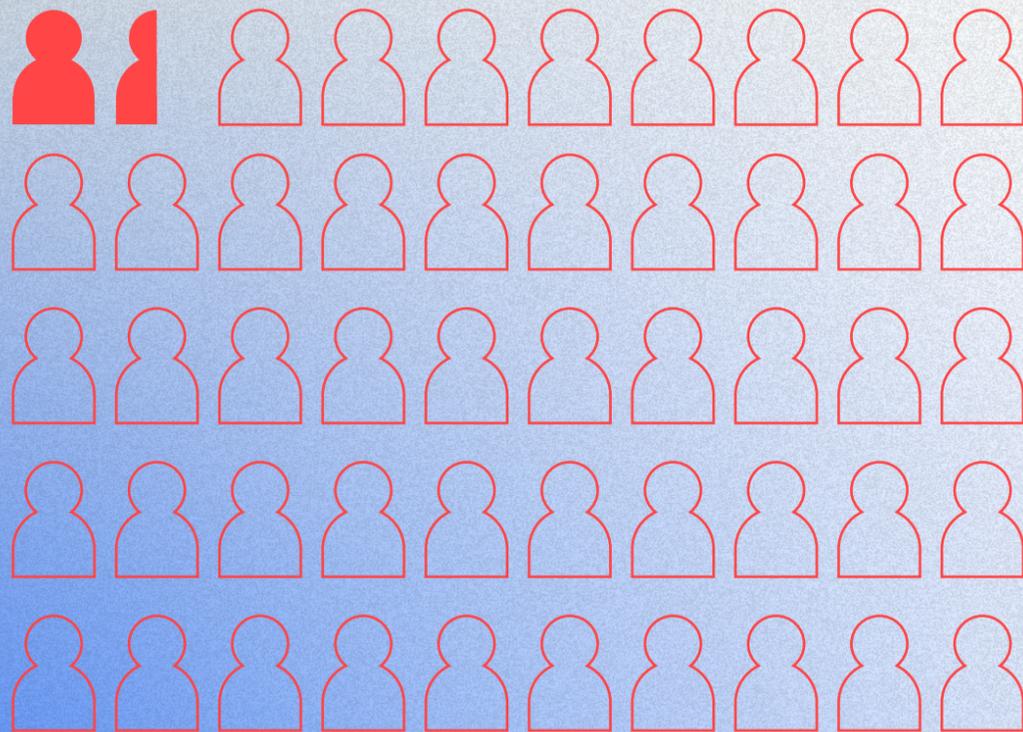
環境問題の事象の理解

【詳しく知っている+大まかなことは知っている・計】

全国男女20-69歳 3,000人の回答

生物多様性というテーマは「身近」ではない。

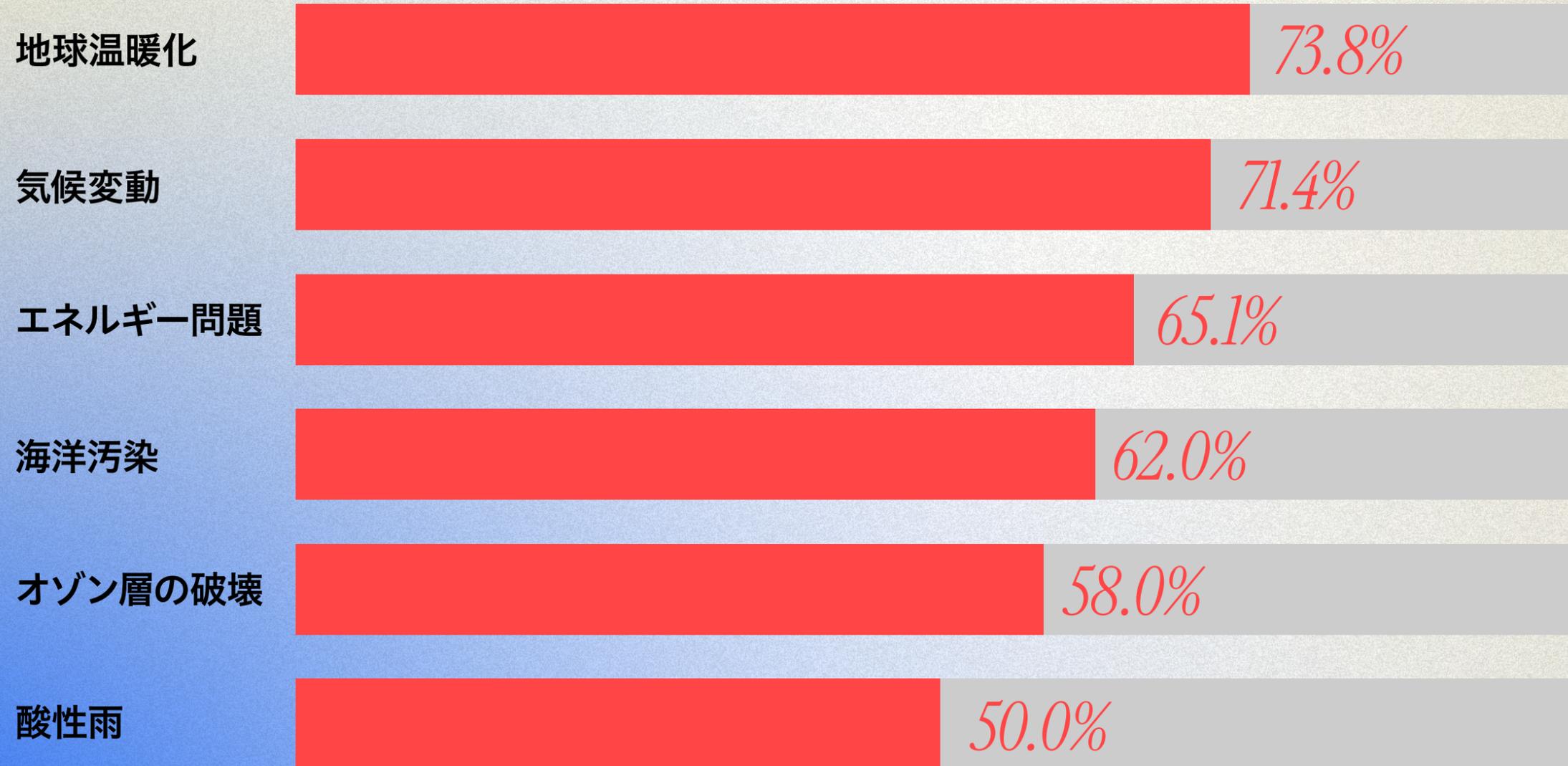
身近な人と話題にすることがある **3.1%**



身近にこの問題の対策に取り組んでいる人がいる **2.2%**



ただ、生物多様性も他の環境問題も 関心はある。



環境問題の各テーマへの関心
【関心がある+どちらかといえば関心がある・計】
全国男女20-69歳 3,000人の回答

環境問題への意識はあるが 具体的なアクションがわからない。

環境保全に貢献したいが
具体的に何をすれば
いいかわからない

63.8%

環境問題への意識
【あてはまる+ややあてはまる・計】
全国男女20-69歳 3,000人の回答

環境問題への意識はあるが 具体的なアクションに自信が持てない。

環境保全に貢献したいが
具体的に何をすればいいかわからない



環境にとっていい行動と言われているものでも
本当にそうなのか**確証がなく、疑ってしまう**



行動はしているが、実際に自分の行動が
環境保全に繋がっている実感がない



迷いの背景には グリーンウォッシュへの疑いの目もあり。

環境問題への取り組みの体裁だけ整えればいいと
考えている企業がいると思う



62.1%

環境に配慮しているように見せかけて
実態はそうではない商品や広告を目にすることがある



52.0%

環境にいいアクションは歓迎されている。

無理せず取り入れられる
環境に良いアクションがあれば知りたい

72.6%

環境にとって良い行動をとるのは気持ちがいい

61.2%

所属している組織やコミュニティで
環境に配慮した取り組みやプログラムがあると嬉しい

48.6%

環境に配慮した行動をとっている人が身近にいると
自分もモチベーションがあがる

47.3%

企業の環境に良い取り組みも「支持・応援したい」。

認知者のうち
支持・応援したい人の割合

ユニクロは、不要になった自社グループの服を、各店舗に設置された回収ボックスで回収し、リユースやリサイクルを実施している。

82.2%

アサヒ飲料は業界に先駆けて商品ラベルのないペットボトル「ラベルレス商品」を発売。タックシールの代わりにPETボトルに直接リサイクルマークを刻印することで、一部商品で完全ラベルレス化を実現している。

78.7%

セブン&アイ・ホールディングスと**日本コカ・コーラ**は、店舗に設置したペットボトル回収機で回収したペットボトルを100%使用した、完全循環型ペットボトルリサイクルを実現している。

75.0%

日清食品は「カップヌードル」の容器を、植物由来のバイオマスプラスチックに置き換えて環境負荷を低くした「バイオマスECOカップ」への切り替えを実施。

72.0%

スターバックスは、バイオマス素材の使い捨てストローの使用を2025年より開始し、順次全国に拡大することを発表した。トルリサイクルを実現している。

65.1%

まだまだ浸透が必要な環境にいいアクションも。

持続可能な水産物であるMSC認証やASC認証を受けた水産物を、意識して買うようにしている

20.7%

フェアトレードの認証マークを意識して商品を買うようにしている

20.1%

適切な森林管理の認証であるFSCロゴマークがついた商品を、意識して買うようにしている

19.2%

最近1年以内に、環境に関する寄付や募金をした

16.2%

最近1年以内に、環境に関するボランティア活動に参加した

13.4%

環境問題への意識
【あてはまる+ややあてはまる・計】
全国男女20-69歳 3,000人の回答

Conclusion

環境問題は身近ではないし、具体的な内容や取り組みも知られていないものも多い。
そして「揺り戻し」には、懸念より賛同の声の方が多く、
様々な受け止め方がある中で、社会が揺らぎ、生活者も揺れている様子が見て取れた。

それでも、環境問題への取り組みが振り出しに戻るわけではない。
環境にいいアクションは多くの生活者から歓迎され、企業の取り組みを支持する声も大きい。

「揺り戻し」を受けて、ただ後退するのではなく、
それぞれにできることを考えるきっかけに変えていくことを目指して。